



## カルメリットとともに

〜アジアン・クルーズ②

周南から徳地を経て山口市に向かう。仁保地区に入ると右手前方に大きなパラボランテナが見える。道の駅・仁保の郷を通り過ぎると右手の小高い丘の上に山口女子カルメル会修道院がある。一九七九年（S54）に建てられ、二〇〇二年（H14）に現在の聖堂ができた。

カルメル会は観想修道会である。世俗を離れ、生涯を修道院の囲いの中で、沈黙の中、

送ライブラリーで公開されている。私の数少ない誇りの一つだ。なぜか彼女たちの生き方にひかれる。閉ざされた空間の中で毎日何度も共同で祈り、一日の時間のすべてを祈りの心と愛の関わりの中で神とともに生きるカルメリット。一方、私は欲望のままに自由に生きている。果たしてどちらが幸福なのだろうか。

折りの最後にはいつも「賛美と感謝のうちに」と唱える。自分の生活で忘れていた言葉だ。今回、クルーズに参加を決めた時、なぜかカルメリットのことを考えた。毎日、神を賛美し質素に生活している彼女たちと余りに異なる旅。少しでもカルメリットと心を共有した旅にしよう、と、カルメリット、三位一体のエリザベットの生涯を描いた「神はわたしのうちに、わたしは神のうちに」（伊従信子著・聖母の騎士社）を持参した。

申し合わせたわけではないが、妻も山口カルメル会編集の「神のみ前に己に目覚めて」という本を持参していた。七万トの船内を散策し、一番気に入った空間は二十人ばかりが入れる図書室だった。クルーズは非現実の生活を楽しむものと何度か書いた。豪華な食事、ショーやカジノな



常に修道服を身にまとい、神を賛美し、典礼に参加するカルメリット

どなど。確かに華やかであった。しかし今振り返ってみると心に残るものはない。それより図書室で持参した本を読んだその内容が心に残る。

二十六歳の若さで帰天したエリザベットの最後の言葉は「わたしは光へ、愛へ、命へ入ります。神への愛に燃えつくした生涯だったという。

非現実の華やかな楽しさにあふれたクルーズも、終われば何も残らない。むしろ地味で図書室で手にした本の言葉の方が私の中に生き続けている。これは

何を意味するのだろうか。

先日、カルメル会を訪れた。日ごろ会えるのは受付のシスターだけだが、その日は特別の祝日で久しぶりに十三人のカルメリットの顔を見る。きちんと修道服を身にまとい、年おいたシスターも笑顔が美しい。彼女たちの歌声が心にしみる。

東日本大震災、政治の行き詰まり、自分が老い、死が身近なものになったせいか、すべてが息苦しい。しかしカルメリットの生き方には光を感じるのである。



船内の図書館でカルメリットの本を読む妻